

No.105

1994.

3. 31

岐阜の博物館

編集兼発行
〒501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111(代)
振替 名古屋 6 37909

資料館作り18か月を顧みて

自分達の手で資料館を作りたい!! 今から思うと無謀ともいえる願いから、私達の資料館作りが始まりました。

先進地の資料館を視察し、その規模や内容に驚嘆し、その努力に敬服すると共に、さて自分達はどうかと話し合い、「自分達の背丈に合った資料館ならやれる」と確認し、「やれることからやってみよう」と始めたのです。

全くの素人ばかりでしたから指導者に岐阜大学助教授伊東久之先生をお願いし、展示協力を日本ディスプレイ社に依頼しました。

基本テーマを「山と川に生きた暮らし」の展示とし、「復元を通じた資料館作り」をすることにしました。

それは集めた民具などを並べるだけでなく、それを使い動かし、実際にやってみる(再現)、そしてそのすべてを撮影し、記録していく。そしてその総合したものを展示するという方法でした。

撮り貯めた写真が1万枚を超え、その中から372枚を選んで展示しました。畳1枚分より大きいものとかカラーは業者に依頼し、その外は自分達で焼付け、展示しました。

産業・生活・歴史・特別の4部門に分けて計画し、それぞれ解説の原稿作り、展示物のコメントなど素人の私達にとって、かなり難問でした。しかし伊東先生やディスプレイ社の指導助言・協力によって、18か月に及んだきびしいが充実感に満ちた資料館作りが、平成3年4月26日完成しました。

ここで特に強調したいことは、村民あげての協

美並村ふるさと館運営委員会

力があつたこと、62名の復原作業協力者の献身的な協力があつたこと、古川茂樹会長を中心に資料委員13名の熱い願いが結集したこと、その家族の支援があつたことです。一口に言えば「自分達の資料館」への願いが結実したといえましょう。更に言えば行政主導型ではなく、民間先導型のため成功したといえましょう。

従って他の資料館との比較やその内容等について思い煩う必要がありませんでした。自分達の背丈に合ったものを作ろうと考え、それを実行したのですから、背伸びする必要がなかったからです。

オープン以来3年めを迎えます。特別展示は現在祭礼を中心に計画し、実施しています。

常設展示も検討を加え、昨年9月木地小屋を復元し、作業工程の一部も復元しました。

年1回元資料委員が集い懇談し、そこから新しい試みが提案されます。限られた建物の中で、何をどのようにしていくのか、10年計画を立て、いくつかの課題を抱えながら、今も手づくりでこだわりつつ、これからの資料館を考えています。

美並村ふるさと館とは、円空仏等を展示した円空ふるさと館と伝承館、そして手作りの生活資料館を合せた名称で、ここでは生活資料館作りについて述べました。

美並村ふるさと館については、本誌No.95号(1991.9.1発行)に紹介済みのため省略しましたので、ご諒承ください。

第59回公開講座報告

戦前の日常生活にみるデザイン

と き 平成6年2月5日(土)

ところ 岐阜市歴史博物館

講師 大塚清史氏

本年度第4回の公開講座は、岐阜市歴史博物館において実施された。講師は館学芸員の大家清史氏にお願いした。大家氏は民俗担当であり開催中の特別陳列「庶民とモダンデザイン」を企画された。今回の講演は、その展覧会にあわせて、展示品を例に挙げながら「戦前の日常生活にみるデザイン」という演題でお話いただいた。

◎ 講演趣旨

1. 特別陳列「庶民とモダンデザイン」のねらい

大正時代末期から昭和時代初期にかけての時代は、明治時代以降の近代資本主義経済のひとつの到達点であり、工業製品の普及、都市における市民層の出現、マスメディアの確立といったように、前近代的な生活様式が払拭され、新しい生活の確立がみられた時代であった。今展覧会は、当時の庶民の生活の身の回りにあった様々な商品や広告を展覧し、それらにみられるデザインの変化と意味を考えるものである。そして、そこに「モダン＝近代化」という時代の流れをくみとり、大量生産・大量消費という現在の生活スタイルの萌芽を求めるものである。



2. 近代工業製品

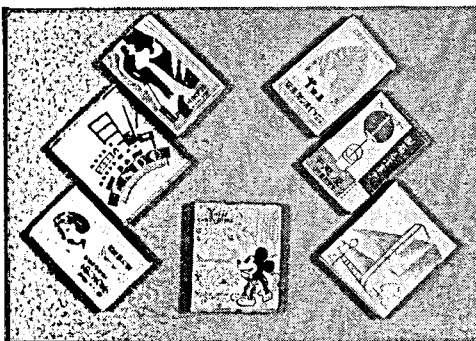
近代資本主義の発達は、生産者による大量生産を可能にし、大量消費という現在と合い通じる消費形態を作り出した。前近代的な個々の注文に応じて製品を作るという、手工業的な生産は影を潜め、流行という付加価値をも勘案し、消費者のニーズに沿った製品を大量生産するようになる。生産者は、より廉価で庶民の物質的欲求を満足させる製品の開発に力を注いだ。その一例として、時計や自転車、蓄音機あるいは扇風機やアイロン等の家庭用電化製品などがあげられる。これらの製品のデザインは舶来品の模倣を端緒とする。初期の国産時計が外国製品を強く意識していたことは、その形状から明らかである。伝統的な和時計を模倣せず、西洋の時計にそのデザインを求めたという事実は、当時の購買層の欧風指向を如実に示している。

また、蠟管から平円盤へ技術的に進歩した蓄音機のソフトは、レコードのプレス加工を可能にし、量産化、低価格化を促した。庶民、ことに都市市民層には、より手に入れ易い商品となり普及につながった。蓄音機のハード自体も、トーンアームの改良によりホーンがキャビネットに内蔵され、同時にポータブル化がはかられた。この蓄音機にみる技術的・形態的進歩も消費者の要望を反映したものと見える。

これらの家庭製品はデザイン的には一定の限界が見受けられるが、昭和初期には機能面では現在とほぼ同等のものを有する製品もあらわれ成熟した様相を呈する。これには、扇風機やアイロンなどの商品があげられる。この時代普及し始めた工業製品、家庭電化製品は、基本的には現在も変わらぬ形態をしている製品も多く、その意味で、我々が現在使用している各種製品の萌芽期であったとも考えられる。

3. 広告

大正時代末期から昭和時代初期にかけ、デザインがより重視された分野に広告がある。視覚に訴える広告は、庶民の購買意欲をそそるモダンなデザインを競い、その善し悪しが商品の売り上げを直接左右する程のものであった。そのような広告のひとつに広告マッチがある。当時マッチは広告媒体として重要な地位を占めていた。そこに描かれる世界は、都市生活者の欧風指向を刺激するデザインで埋められ、図案化された文字によって、店名や商品名が飾られている。それは従来の商品や業種に関係なく、大黒や布袋等のいわゆる縁起物が描かれる引札と対照的で、一見して何をアピールしているかが判明するものだった。相対的に広告価値が下がってしまった現在の広告マッチと比較しても、当時のものは際立っている。とくに現在の売店兼喫茶店と同じであった洋菓子や製パン会社の「キャンデーストアー」の広告マッチは、近代的な欧風建物をメインにしたデザインが多かった。これも当時の庶民の欧風指向を反映するもので、建物の外観、あるいは欧風の室内でテーブルに向かい、椅子に腰掛けて食事が出来ることをセールスポイントに、集客効果を上げようと努力が払われている。こうした広告マッチは、常に人々を引き付ける斬新さを求め、シリーズものなどの企画など、都市生活者の流行に対する意識を常に刺激するものであった。



4. 娯楽と流行

当時、庶民の娯楽として不動の地位を占めていたのは映画であるが、その他、大正14年に



ラジオ放送が開始され、受信機が急速に普及した。また、蓄音機が庶民の娯楽として受け入れられていくとともに、レコードも1円以下の廉価盤が昭和初期より発売された。このようにして、情報が同時に・各地へ・大量の人々に伝達されるマス・メディアが整備されていくに伴い流行が創出されるようになった。特に流行歌はこれらの相乗効果によって生み出されていったもので、さらには楽譜化して出版されるなどして広まっていった。

この中で、レコードは廉価盤といえども高級品であり、そこに収録されている音楽自体を庶民は求め、聴くためのものであった。そのためレコードを包む袋紙は、非常に簡素で画一的なデザインのもが使われていた。逆に流行歌曲を多数出版していた楽譜は、それぞれの表紙に歌曲に即した人目を引く装丁を施している。15銭前後と安価な分、庶民の手に届きやすく選択出来る。それだけに収録曲以外の付加価値や差別化による販売促進が必要であったようだ。

5. まとめにかえて

限られた資料ではあるが、大正時代末期から昭和時代初期の、日常生活の商品やそのデザインの中に、現代のライフスタイルの萌芽をみる事が出来る。展覧会アンケートでも、19歳の観覧者が「初めてみるものばかりだが何だか懐かしい」と述べ、決して現在と隔絶していないことを窺わせる。質・量ともにはるかに凌駕する物質情報社会の現代にあっても、そのルーツを当時に求める事が出来るものは多い。

(岐阜市歴史博物館 横田 宏)

考古学からみた飛驒宮川村

—— 吉城郡宮川村における埋蔵文化財調査の成果 ——

宮川村教育委員会埋蔵文化財担当 林 直樹

はじめに

岐阜県の最北端、富山県境に位置する宮川村では、1989（平成元）年以来、計5遺跡の発掘調査が実施されている。いずれも道路改修や観光施設整備などの開発に伴う緊急調査であり、調査終了後の遺跡破壊は避けられない状況にある。

開発による文化財消滅は残念なことではあるが、一連の発掘調査で得られた資料が、多くの難問を抱えた飛驒考古学研究の空白部を埋めつつあることもまた事実である。

検出された遺構・遺物の多くは縄文時代（約1万2000～2300年前）に属するもので、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の各時期を通時的に見ることのできる興味深い資料となった。調査及び資料整理は今もなお進行中であり、詳しい内容は報告書に譲らなければならないが、ここにその成果の一端を記したい。

1. 宮ノ前遺跡（旧石器から縄文へ）

西忍地区に所在。東南向きに発達した河岸段丘上に営まれた遺跡であり、旧石器時代のナイフ型石器が出土した稲葉遺跡（約1万8000年前）に近接する。93年度の調査区からは、旧石器時代終末期から縄文時代草創期・早期にかけての文化層が良好な状態で発見され話題を呼んだ。特に旧石器終末期（約1万3000年前）の層では、当時の植物（オニグルミ・トウヒなど）が石器や木製品とともに生々しい状態で見つかった。氷河期最終末の自然環境と人類文化を考える上で貴重な資料である。

宮ノ前遺跡では縄文前期～晩期の遺物も多く出土している。中でも前期後半（約5500年前）の土器とともに出土した石製耳飾りの完形品は、

北部飛驒初の例となった。

2. 堂ノ前遺跡（縄文中期の集落）

野首地区に所在。川に近接する低位段丘に広がる集落遺跡。20軒以上あったと推定される住居のほとんどは縄文中期ごろ（約4500年前）のものである。土器のかたちや模様には北陸の強い影響が見られる。日用品としての土器・石器のほか、特殊な模様を刻んだ大型石棒や石皿、動物の顔をあしらった土器など、当時の人々の信仰生活と関わる遺物が出土した。また4つの炉を有する住居が検出されており、ドリグリのアク抜き場とも集会所とも言われている。

中期の集落は洪水により堆積した砂の上に営まれていたが、その砂の下には早期から前期にかけての遺物が眠っていた。石製耳飾りの完形品（前期）はここでも出土している。洪水は遺跡近くの川底を横切る活断層（跡津川断層）の活動により引き起こされたものらしい。跡津川断層が引き起こす大地震は約2000年周期でやってくるというが、1858（安政5）年の地震の被害の恐ろしさは今も古老により伝承されている。堂ノ前の地に住んだ前期縄文人も地震の被害をこうむったのであろう。

3. 瑞穂遺跡（縄文中・後期の集落）

杉原地区に所在。遺跡は日当たりのよい台地の上にある。縄文中期後半～後期前半（約4000～3500年前）の遺物が多く出土した。見つかった竪穴住居のうち、床を意図的に焼いたと思われるものがあり注目される。湿気対策か、あるいは祭祀の場か。研究者の見解は分かれるが、今後の事例追加が待たれる遺構である。

4. 塩屋金清神社遺跡（縄文後期の生産遺跡）

塩屋地区に所在。遺跡の裏山には材林のように割れる自然石（柱状節理凝灰岩）の露頭があ

る。縄文人はこの石材を利用し、石棒と呼ばれる石製品を製作した。石棒は男性器をモデルとしたもので、祭祀の道具あるいは信仰の対象とされたと考えられている。石棒は縄文中期から晩期にかけて盛んに製作されるが、塩屋の地には豊富な石材を生かした加工場が営まれたようだ。出土土器の年代から考えて、石棒製作のピークは縄文後期前半（約3500年前）。塩屋産の石棒は村内はもとより飛騨・越中の各地で見つかっている。

発掘調査により見つかった石棒の数はすでに900点を越えている。今なお土中に埋もれているもの、すでに遺跡外へ持ちだされたものを含めれば、その数量は千点単位となる。江戸時代の人々は田畑から姿をあらわす石棒のかたちに神秘を感じ、いつの頃からか社殿を建て「子授け・安産の神」として祀るようになった。社殿は現在も遺跡の一角に鎮座しており、3点の大型石棒が「御神体」として納められている。

5. 家ノ下遺跡（縄文後・晩期の集落・墓地）

林地区に所在。立地は堂ノ前遺跡に似る。縄文後期後半～晩期にかけての遺跡で、北陸色の強い土器が多数見つかったほか、住居や墓のあとも確認されている。

晩期になると飛騨や北陸では石冠や御物石器と呼ばれる奇妙なかたちをした石製品が流行した。いずれも実用品とは考えにくく、晩期縄文人の信仰生活と関わる遺物と思われる。家ノ下遺跡でも多数の石冠・御物石器が出土している。家ノ下遺跡がかつて墓地であったことを考慮するならば、石冠や御物石器が人を葬る儀礼に関わった可能性も推測できるが断定はできない。その不思議なかたちに似つかわしく、用途も不明な石製品である。

家ノ下遺跡や宮ノ前遺跡・瑞穂遺跡では若干ではあるが弥生土器の破片が検出されている。縄文晩期最終末から弥生時代初頭にかけての時期には、従来強かった北陸の影響が薄らぎ、代わって信州や東海方面の影響が現れる。

6. 縄文以後の宮川

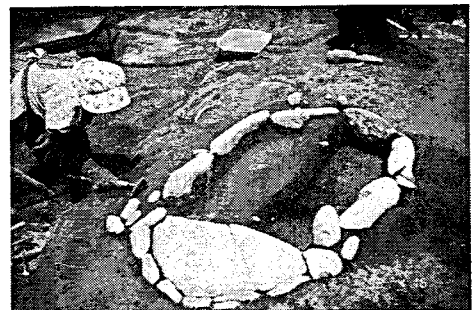
狩猟採集民である縄文人にとって、自然環境に恵まれた宮川の地は住みよい場所であったようだ。石棒や御物石器に象徴される精神文化の発達、彼らの暮らしにある種の「余裕」があったことを意味する。

しかしながら主導的産業が稲作に移り変わる弥生時代以降、人々の足は次第にこの宮川から遠のいたと思われる。この村の開発が再び進むのは奈良時代後半以降のことらしい。宮ノ前遺跡では奈良・平安時代の土器のほか、鎌倉・室町・江戸時代の陶器・磁器が出土している。その中には遠く中国からもたらされた青磁もある。宮川のような稲作に不適な山村において、輸入磁器を所有することのできた人々はいかなる暮らしをしていたのだろうか。疑問はつきることなく湧いてくる。文献資料の乏しい飛騨の古代史・中世史を探る上で、発掘調査は有力な手がかりを与えてくれるであろう。

最後に

以上の内容は調査成果の一端に過ぎない。野外調査や資料整理が進む中、新たな「発見」が相次ぐことは容易に想像できよう。それらは時に新聞紙上を賑わす「大ニュース」にもなり得る。しかしながらそのような「発見」と引き換えに、かけがえのない文化財が次々と滅失していく現状も厳粛に受けとめなければならない。

宮川村では貴重な埋蔵文化財を保管・研究し、その一部を一般に公開・活用する施設として、「出土文化財管理センター」建設を構想中である。この小文に最後まで目を通して下さった方々のお越しを願える日もそう遠くないであろう。

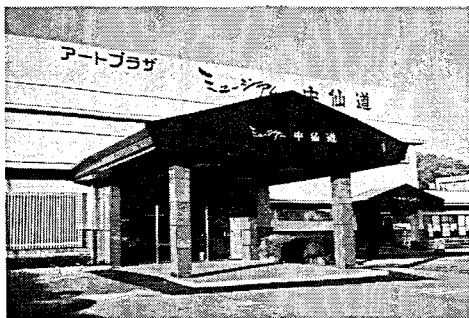


アートプラザ
ミュージアム中仙道

〒509-61

瑞浪市明世町戸狩331

TEL (0572)68-0505



「美術品は、人に感動を与えることで生きてくる。日本の美、そのルーツである東洋文化を再発見するきっかけの場にしてほしい。」という思いを多くの方々に伝えたいと、平成4年11月23日に開館したのが、美術品、博物品等を展示するミュージアム中仙道です。

中央道瑞浪 I.Cの近く、瑞浪市の市民公園に隣接していて、床面積 2700㎡をもつ2階建の美術館で、100台収容できる駐車場も完備されています。

正面玄関を入ると、先ず目につくのがロビーの吹き抜けによる広い空間とシャンデリア、そしてスタンドグラスです。ゆったりとしたソファがおかれて、鑑賞後の余韻をゆっくりとかみしめることができます。

日本を中心に東洋の美術の粋を集めたこの美術館の館内には、一階を四つの常設展示室と一つの特別展示室、二階は特別企画展や講演会、レセプションに使用できるステージ付の多目的大ホールや地元陶芸家の自由個展等が開催できる部屋があります。

第一展示室には、美濃地方に伝承された地歌舞伎をはじめ江戸・上方歌舞伎の資料など江戸・明治・大正・昭和の四代にわたる地歌舞伎の衣装類等が展示されています。

第二展示室には、中国数千年の歴史をけみした陶器や漢から明末までの陶磁器が展示されています。

第三展示室には、室町期から現代に至る日本画「秋草花月」尾形光琳、「怒涛の図」横山大観、「春の宵」上村松園などと季節ごとに展示替えされています。

第四展示室には鎧・刀剣、その他多彩な武器類が展示されています。

特別展示室では、年間3回くらいの企画展と数回の時に応じた特別催し展示が行われています。最近の企画展では、ロシア・プーシキン美術館所蔵の幻の里帰り浮世絵展が行われたことは特筆すべきであります。

展示室はそれぞれに約40㎡の展示壁面をもって、各部屋共、自動センターによる照明設備になっています。

同館周辺には、化石博物館、陶磁資料館、市之瀬記念館などが、近い距離に点在し、美術散策ルートになり、心静かな時を過ごすのもよいだろうと思います。



◇交通 JR中央線＝瑞浪駅下車

バス8分、徒歩20分

自動車＝中央自動車道

瑞浪 I.Cから2分

◇開館時間 午前9時～午後5時

◇入館料 大人700円、小人400円

◇休館日 毎週火曜日